

国人を隔離しようとする政策のその後を見通して結びとしている。そこでは、外国人隔離政策の残滓が、さまざまなかたちで近現代にも見受けられるという意外な事実が指摘される。

以上のように、本書は海防をキーワードとして、近世後期の対外関係史を通観した書である。一般向けに書かれた著作ではあるものの、対外関係を見る上で軸となる視点を示したことにより、本書は今後の研究を大きく裨益するものとなるに違いない。また、美麗な表紙の絵は、異国船を多数の小舟で包囲する「垣船（かきぶね）」を描いた図であるが、このような海防の専門用語を筆者は本書によつてはじめて知った（少なくとも『日本国語大辞典』『国史大辞典』にも掲出されていない）。著者はさりげなく使用しているもの、こうした用語を史料から拾い出し紹介したことも、本書の大きな成果ではないだろうか。

蛇足ながら、気になった点も挙げておきたい。まず、外国人名・船名について誤植がたびたび見受けられることである。一例を挙げれば、ゴロヴニン事件に関わったロシア海軍軍人「ニコルド」とあるのは、P. I. Rikordなので「リコルド」と記すのが妥当だろう。また、数多くの事例を粗上に乗せているため、それぞれの最新の研究成果を拾いきれていないところもあると思われる。たとえば、ロシア使節レザノフは来航時にやはり隔離の措置を受けており、大島幹雄訳『日本滞在日記』（岩波文庫、二〇〇〇年）ではこれについて詳述されている。隔離を受けた側の体験談としても貴重と思われるが、本書で利用されていないのは疑問である（レザノフの同行者であるクルーゼンシュテルンの『日本紀行』を引用している）。もちろんこうした諸点は本書の重大な瑕疵となるほどのものではない。

気鋭の研究者によつて書かれた、対外関係史の新視点を提示する魅力的な書である。当該分野に関心のある向きには、ぜひ書架に加えられることをお勧めしたい。

（濱口 裕介）

〈近刊紹介二〉

黒田 康弘著

『帝国日本の防空対策——木造家屋密集都市と空襲——』

新人物往来社 二〇一〇・一〇刊行

三五八頁 二六二五円

東京大空襲の犠牲は、木造家屋が密集していた都市構造にあったのではないか。関東大震災後の都市改造の不十分さ、戦間期に起こった防空論に対する軍隊の不理解と弾圧、そして条件整備をおざなりにしたままの民間防空体制の実態。著者は東京大空襲にいたるまでの日本の防空体制をめぐる過程を、民間と官（政府・官僚）による防空（民防空）という視点から通観することで、戦前期日本の問題点を抉り出そうと試みている。

東京大空襲を軍隊における防空（軍防空）という視点から捉える研究は、これまでかなりの蓄積を持っているが、「軍防空」と「民防空」とを比較対照させながら、戦前期日本における防空体制を総括的に扱った研究は殆ど見られない。こうした視角は、本書の大きな特色の一つである。

著者は、東京大空襲によつて膨大な犠牲者が生じた原因を、第一義的には米軍の無差別絨毯爆撃に求めつつも、それ以外に「わが国

にも犠牲者を拡大した要因がなかったか」という観点から、本書のアプローチははじまる。著者も指摘するとおり、戦間期において防空を声高に叫んだ軍部は、その一方で防空体制の不備を指摘した言論に対して弾圧を加えていた。こうした軍部の行動が、日本の防空体制の整備を確実に遅らせた要因となったことは紛れもない事実である。しかし著者は、こうした軍防空だけが日本の防空体制の整備を遅らせた原因ではなく、民防空の側にも大きな問題があったと主張するのである。

では民防空の問題とは何か。著者は、関東大震災の教訓を生かした防災都市化を政府や官僚が進めなかった四半世紀前の不作為にこの問題の起源を求める。さらに著者は、戦間期の内務省官僚たちが、日本の都市の脆弱性を知りつつ、防災都市化を進めようとしなかったことを、専門家集団による提言などから立証しようと試みている。そして著者は、官僚達はこうした不作為を重ねた末、いざ戦時期に至ると、空襲体験をもたない国民にその危険性を周知させ、身の安全を重要視させる政策ではなく、無謀な消火活動に重点をおく指導をしたことが、民間人の被害を拡大させた大きな要因になったのだと強く批判を加えるのである。

著者は、東京大空襲の背景には、都市防災化に対する政府や官僚たちの不作為があり、その理由を天皇制国家の官僚であった彼らには、もともと国民の生命の安全を第一とする考え方が希薄だったためであると述べる。そして戦争が始まると、彼らは「国民に対して国を護る責務だけを強調して、条件整備をないがしろにした」。その結果が、犠牲者を生み出した大きな要因だったと断じるのである。ただ、著者のいうように戦間期における防空体制の構築が遅れた

要因として、政府や官僚の不作為が指摘されるとしても、そこには予算的な制約といった側面はなかったのだろうか。また、都市の防災化と都市の防空化が近似の関係にあることが事実であるとしても、都市の防災化で空襲に対応することにはおのずと限界があったようにも思われる。第一次世界大戦で空襲を経験し、都市の防災化を一定程度実現させていたドイツの都市に対し、連合国軍は焼夷弾ではなく通常爆弾による無差別爆撃を行なうことで都市破壊に「成功」している。

しかし本書で著者が言わんと試みていることは、政府や官僚は、民間人の被害を局限化させるため、本当に最大限まで努力したといえるのか。こうした点の追及にある。換言すれば「空襲の被害は軍(だけ)の責任」とし「空襲を戦闘の側面だけで語らせること」で「東京大空襲の惨禍は米軍による無差別爆撃のためであり、対策に問題がなかった」として口をぬぐおうとする、官僚たちの「無謬性」への批判こそが、本書を通観するテーマなのだからだ。

防空という問題が広汎であるがゆえであろう。本書の論述は時に微細で、時には概説的な内容となつていて嫌いもある。しかし空襲をめぐる日本国内の動向がいわば「総花的」な内容であることが、むしろ本書を空襲を知らない世代や初学者が、日本本土空襲の全体像を把握するための好著たらしめているように思われるのである。

著者もまた、そうした「誰の手にも取りやすい」一冊となることを、より強く望んでいるように思われる。

(横島 公司)